令和７年度（2025 年度）島根県立大学
国際関係学部　国際関係学科
国際関係コース

学校推薦型選抜（一般推薦）

小論文

【解答時間　９０分】

以下の１から８をよく読んで、その指示に従うようにしてください。
指示に従わない場合は、不正行為と見なしますので、注意してください。

1. 解答開始の合図があるまで、この問題冊子を開かないでください。許可なく問題冊子を開いた場合は、不正行為と見なします。
2. 解答時間は９０分です。
3. 試験問題は、１ページから４ページです。解答開始の合図があった後、問題冊子を確認し、印刷不鮮明な箇所等があった場合は、直ちに申し出てください。
4. 解答用紙は２枚あり、問題冊子とは別になっています。解答は指定された解答用紙の解答欄に横書きで記入してください。
5. 受験番号、氏名は２枚の解答用紙の所定欄すべてに記入してください。
6. 問題冊子の余白を下書きに利用しても構いません。
7. 試験時間中の退出はできません。
8. 試験終了後、問題冊子は持ち帰ってください。

問題　次の文章を読んで、あとの設問１～３に解答しなさい。

（A）平和の問題に対する人びとの態度は、あまりにも単純なものでありつづけてきた。おそらくその第一の理由は、われわれの知的な怠惰に求められるかもしれない。戦争の原因をある特定の勢力に求め、それを除去することによって平和が得られるという善玉・悪玉的な考え方は、われわれ人間が行動力には勤勉でも、知的には怠惰な存在であることに原因している。昔から、困難な状況に直面したときの人間の態度は、いつも判で押したように同じであった。そんなとき人間は、いつも非難すべき悪い人間や悪いものを見出して、それを血祭りにあげてきたのである。そしてそれは、二重の意味で人間の知的労働を省いてきた。

まず、それは単純明快であった。つぎにそれは、普通の人びとのほうはなにも変化しなくてもよく、それまでどおりの生活をつづけることを可能にするものであった。もちろん、このような思考法で問題を解決することはできない。しかし悪役を除去する必要が、人間の闘争心を駆りたて、人間を行動的に勤勉にさせた。しばしば、悪玉と善玉のあいだに闘争がおこなわれた。そして、闘争というものは人間を酔わせるものである。闘争のあとで人間は、問題が解決されたと思うことができる。それに闘争は、社会をゆさぶることによって、じじつ少しは問題を解決するのである。

この行動様式は、人間が戦争の危険という困難な状況に直面し、平和を求めたときに、つねに現われてきた。その傾向は、平和の問題については、いっそう強く現われた。問題が抽象的で、困難なものであったためである。十八世紀には王と貴族が悪役に仕立てられた。戦争は王の気まぐれからおこると考えられたが、それはつぎのような当時の一口話によく現われている。

ルイ十四世の大臣ルーボアは、ルイ十四世のためにトリアノン宮殿を造ったが、その窓の形がルイ十四世の気に入らなかった。そこでルイ十四世の注意を他にそらそうとして、ルーボアはオーストリアと戦争をはじめた。

この話の真偽はここでは問題ではない。こういう一口話は、その時代の一般的な考え方をよくあらわしているものなのである。そこで、民衆の代表者が王の権限を制約することが平和への道であると考えられた。（中略）

十九世紀には貴族と地主が悪役となり、国家間の垣根を取り除く自由貿易が完全におこなわれるならば、平和が訪れるという信念が普遍的であった。（中略）二十世紀には、つぎつぎに悪役が作られ、それが除去されたあとでは、また別の悪役が作られた。

ドイツの皇帝カイザーとその軍国主義体制、ヒットラーとファシズム、資本主義、共産主義の新帝国主義などが悪玉にされ、それと戦うものが善玉を自認した。そしてこの場合、二十世紀の悪玉と善玉の戦いは、それがある特定の国と結びつけられたことによって、それまでのものよりも具体的で血なまぐさいものになった。

こうしてつぎつぎに悪玉が作られ、それを打ち破った善玉がつぎつぎに期待を裏切っ

たことは、善玉・悪玉的な考え方をゆさぶってきた。しかしそれは、人間性のなかに奥深く根ざす考え方であるために、漠然たる形で、平和の問題に対する人びとの態度に影響を与えつづけているのである。

善玉・悪玉的な考え方と並んで見逃すことができないのは、国際政治の構造の単純化である。人びとは世界の平和について論ずるとき、国際政治の構造についての驚くほど単純な考え方から出発している。軍備をなくすることによって平和を求めるという考え方は、そのもっとも代表的なものである。その考え方の基礎には、諸国家が武器を持ってにらみあっている状態が国際政治であるという現状認識がある。そうでなければ、武器さえなくすれば平和が訪れるという確信を持てるはずがない。

また、国際連合による平和という考え方も、やはり同じような現実認識の上に立っている。だからこそ、各国がそれぞれ軍事力を持つのをやめて、世界連邦を作り、その警察軍が秩序を維持すればよいという考え方が生まれるのである。

こうした考え方は、諸国家が単純な力の単位であり、国際政治はその力の単位が並立する場所であるならば、正しいであろう。しかし実際には、国家は単なる力の単位ではないのである。国家は力の体系であると同時に、利益の体系でもある。すなわちそれは、人びとの経済活動にとって、もっとも重要な単位なのである。もちろん、貿易関係は国境を越えておこなわれる。逆に、人びとの生活に直接関係のあるのは家庭であり、職場である。しかし、経済活動を構成するさまざまな循環、金の流れや物の流れがおこっているのは、国家という枠のなかである。経済計画がたてられ、国民の福祉のためのさまざまな政策がとられているのも、国家という枠組みのなかである。日本の繁栄はわれわれの生活と直接に結びついている。これに対して、アメリカや中国や朝鮮の繁栄とわれわれの生活はたしかに結びついてはいるが、その結びつきは比較にならない。このように各国がそれぞれ利益の体系である以上、各国家のあいだには利益の調和もあれば衝突もある。各国家のあいだの利益関係をぬきにして平和の問題を論ずるわけにはいかないのである。

しかも国家は、力の体系であり利益の体系であると同時に、価値の体系でもある。われわれは自分の欲する行動をとって生活している。しかし、それが社会に混乱をもたらさず、多くの人とのつながりを保っていくことができるのは、そこに共通の行動様式と価値体系という目に見えない糸が、われわれを結びつけているからなのである。国家から家に至るさまざまな制度も、この目に見えない糸によって支えられて、はじめて成立するのである。

この行動様式と価値体系は歴史的に作られてきたものだから、われわれが意識するよりはるかに深く、われわれの心のなかに食い込んでいるのであり、同じ理由から、世界のすべてに共通する一般的なものではなくて、国や地方などによって異なる特殊的なものである。そして日本と外国とを分けているのは、人間が勝手に引いた国境線ではなくて、むしろ言語や習慣に体現された行動規準と価値体系の相違なのである。つまり「常

識」がちがうのだと言ってもよい。

（中略）

この「常識」はもちろん不変のものではない。それは時とともに変化し、異なった「常識」と同化することもある。しかし、この「常識」が外的な力によって突如として変えられたとき、その民族は方向感覚を失った鳥のように滅んでしまうのである。こうしてわれわれの日常行動を規律する「常識」は、われわれがふつう意識しないけれども、きわめて重要なものである。じっさい国際社会について考えるとき、まずなによりも重要な事実は、そこにいくつもの常識があるということなのである。さまざまな言語の存在はその一つの現われである。

言いかえれば、国際社会にはいくつもの正義がある。だからそこで語られる正義は特定の正義でしかない。ある国が正しいと思うことは、他の国から見れば誤っているということは、けっしてまれではないのである。そこにも緊張と対立がおこる可能性がある。

各国家は力の体系であり、利益の体系であり、そして価値の体系である。したがって、国家間の関係はこの三つのレベルの関係がからみあった複雑な関係である。（B）国家間の平和の問題を困難なものとしているのは、それがこの三つのレベルの複合物だということなのである。

（出典：高坂正堯『国際政治―恐怖と希望』中公新書、1966 年、13-20 頁。なお、出題にあたって、見出しや一部内容を省略している。）

設問１　下線部（A）に関して、平和に対する単純な態度として著者が指摘している考え方にはどのようなものがあるか、150 字以内で述べなさい。

設問２　下線部（B）に関して、現在の世界において、著者が述べる三つのレベルのうち、二つ以上のレベルで対立が生じている二国間関係にはどのようなものがあるか。あなたが知っている事例を一つ挙げた上で、それらの国の間にどのような問題が存在するかを 250 字以内で説明しなさい。

設問３　文章全体を読んだ上で、国家間関係や平和の問題について認識を深めるために、あなたは本学の国際関係コースでどのような学びをしていきたいと考えるか。これまでの経験や学習によって生じた問題意識もふまえながら、600 字以内で述べなさい。